

研究区分	教員特別研究推進 教育推進
------	---------------

研究テーマ	特別養護老人ホームにおける介護職員の利用者への「触れ方」の知識について				
研究組織	代表者	所属・職名	短期大学部・助教	氏名	大石 桂子
	研究分担者	所属・職名	短期大学部・非常勤講師	氏名	秋山 みゆき
		所属・職名		氏名	
		所属・職名		氏名	
	発表者	所属・職名	短期大学部・助教	氏名	大石 桂子

講演題目	A特別養護老人ホームに勤務する介護職員の触れ方に対する調査
研究の目的、成果及び今後の展望	<p>厚生労働省によれば、平成 27 年度の入所者の平均介護度は 3.87 であったのに対して、平成 30 年には 3.95 に上昇している。小西は「介護老人福祉施設入所者の日常生活活動」において、要介護 4 と要介護 5 の入所者のほとんどが、移乗（ベッド・車椅子間）、入浴、更衣、歩行の介助を必要としていると述べている（2005）。介助は、介護者が入所者に『触れる』行為を通して行われていることが多い。理学療法士の田中は、誤った触れ方は入所者に痛みを与え、筋肉が緊張し拘縮を進行させてしまうと述べている。さらにイヴ・ジネストラは触れることについて「この不可避な馴れ馴れしい行為を、しこりを残すことなく受け入れてもらえるようになるには、並はずれた技量とこれ以上ないほどの繊細さがなければいけない」と述べている（2014）。しかし、介護福祉士養成テキストでは介助時の利用者への触れ方についての記載は少なく、十分な教育がされていないと考える。そのため本研究では介護老人福祉施設に勤務する介護職員の触れ方について知識や技術について調査し、現状の課題を明らかにすることを目的とした。今回は、調査紙を作成するための事前調査として、A特別養護老人ホームの介護職員に対して意識調査を行った。</p> <p>【成果】</p> <p>A特養に勤務する介護職員 15 名に質問紙を配布し、14 名から回答があった。回答者は全員が介護福祉士を有していたが、介助時の利用者への触れ方についての技術や知識については、学んだことがある（4 名）、学んだことがない（10 名）という結果となり、半数以上が学んだことがなかった。さらに、介助時の触れ方の一つである虫様筋握りについては、知っている（2 名）、全く知らない（11 名）という結果となり、触れ方についての専門的知識を得ている職員は少ないという結果となった。一方で、触れ方による利用者への心身に影響については、ある（11 名）、まあまあある（3 名）となり、その理由として、力の入れ加減で利用者へ恐怖心や不快感を与える、突然触れることで恐怖心を与える、触れ方によっては痛みや苦痛につながる、心地良い触れ方は利用者が安心できる、などの意見が見られた。さらに、実際に行っている利用者への触れ方については、両手で関節と関節を下から支える（7 名）、片手で前腕全体を使って下から面で支える（8 名）となり、介護福祉士養成テキストに記載されている方法で触れている職員が多かった。このことから、介護職員は現場での経験から利用者への触れ方について自ら考えてケアを実施していることが伺えた。事前調査から、介護職員が介護時の触れ方の技術を向上・根拠を理解するためには現場での教育が必要であることが伺えた。今後は、本調査を踏まえた調査紙を作成・調査を行い、さらに観察による調査も検討していきたい。</p>